



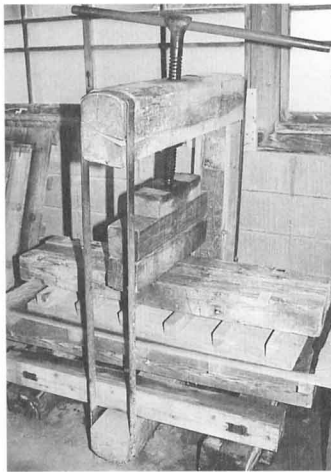
⑥紙をすく



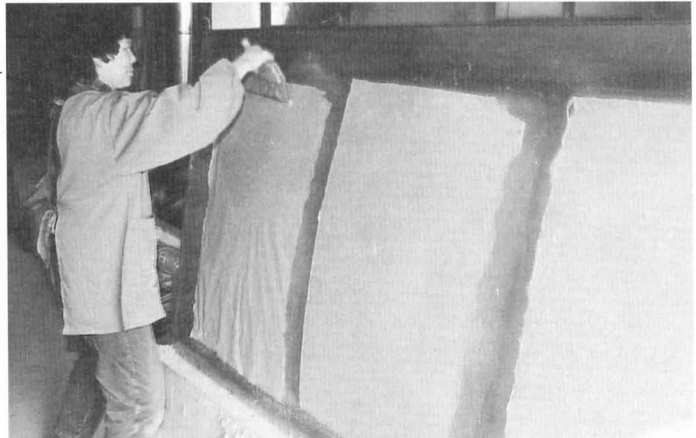
いよいよ紙すきです。こまかくくだかれた「こうぞ」を大きな四角のコンクリートの箱のようなどころに入れ、水とネリをまぜてドロドロの水のようにします。そして、紙すき機という竹で作ったあみのようなもので一枚一枚すきあげます。よい紙がすけるようになるまでにはたいへんな努力がみつようでした。

一日に400枚すければふつう。名人といわれる人は500枚ぐらいすくことができました。

▼⑦機械で水をしぼる

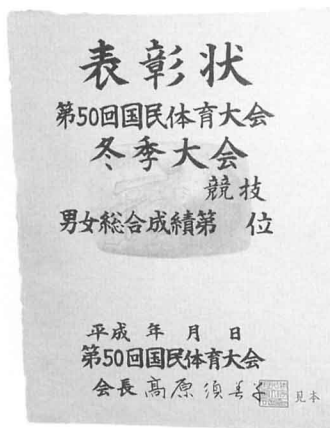


▶⑧できた紙をかわかす



平成7年に福島県でおこなわれた国民体育大会のときの賞じょうはぜんぶ上川崎の和紙でつくられみんなにとっても喜ばれました。

▼第50回国体の賞じょう



昔は大きな板に1枚1枚はりつけてお日さまの力でかわかしました。天気がわるくなると家の中にしまわなければならないのでたいへんでした。

今は鉄板でできたかんそう機にはりつけてかわかすので天気がわるくても、夜でもかわかせるようになりました。

昔はしょうじ戸が多かったのですが、今はガラス戸が多くなり、しょうじ紙はあまりいらなくなりました。手で1枚1枚すくのでたくさんできません。今ははぎやびんせん、ふうとう、紙絵のざいりょう、賞じょうなど小さな紙の方が多くなりました。

和紙は世界でいちばんじょうぶで美しい紙といわれています。夏、温度が高く、しめりけの多い日本にいちばん合っている紙といえます。しかし、作り方がむずかしく、またたくさんつくれないのでだんだん紙すきをする人がすくなくなりました。このまま紙すきをする人がいなくなってしまうのはとてもごんねんなことです。紙すきの仕事を大切にしたいものです。



自分の身のまわりにどんな和紙のせい品があるのかさがしてみましよう。